

焔天理は勇者のなりそこないである

丑こく参り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺、焰天理には一人の幼なじみの少女がいる。

名前は郡千景。村では蔑まれ、親には疎まれる、そんな少女だ。

俺は千景の……味方、なのかな？まあ、親友とは呼べる間柄だ。

そして、俺は天の神を許さない。彼女を苦しめた相手を許せない。

彼女の、彼女たちの平穏を守るためなら——俺は怪物になろう

目次

7・30災害	1
大社	4
一年後	7
焰	10
依頼	12
孤独の社	15

7・30 災害

「……眠い」

俺は教科書を立てて眠っている。

俺が暮らしているのは小さな農村である。まあ、体よく言えば田舎だ。

「……つと、そろそろ時間か」

先生が時間を確認したのを見ながら起きて礼をする。

正直に言えばこの学校は……嫌いだ。

何せ、無駄にルールには厳しいし、農村、というか小さなコミュニティ特有の差別みたいなものがある。

俺には親父も母親もない。というか天涯孤独の為、おとなりさんと一緒に過ごしている。

……とは言っても、おとなりさんは村八分されているけど。

「あ、千景」

「天理。……私と話さない方が良いって前に言わなかった？」

「いや。って言うか、俺の場合は村八分なんて風習はどうでも言い訳だしな」

俺は隣の席に座っている黒髪の少女に話しかける。

彼女の名前は郡千景。俺のおとなりさんと幼なじみの少女で家ではよく一緒にゲームしている。

千景の家は……正直に言えば最悪だ。

父親は俺みたいなガキが大きくなつたような、いやそれよりも酷い無責任で母親は不倫してどっかに行ってしまった。離婚は……『どっちも千景を引き取りたくない』と言う無責任の上に無責任を重ねたような糞みたいな理由でしていない。

しかも、親経由で母親の不倫が餓鬼に伝わっているせいで階段から突き落とされるようなガキの俺でも分かるような酷いイジメを受けている。

まあ、俺にはどうでもいいけど。千景は千景なんだし。

「それに、俺としては千景が傷つく姿なんて見たくないからな」

「けど、それだと貴方が……」

「俺なら別にいいよ。俺の傷なら幾らでも甘んじて受け入れられる」

悲痛そうな顔をする千景の頭を撫でながら辺りにいる餓鬼を警戒し、それを見た餓鬼は忌々しそうに舌打ちをする。

俺がこうして話しているのも千景が傷つけられない用にするためにやっているのだ。

こうやって話している事で千景を傷つけようとする餓鬼を威嚇することが出来るし、村から蔑まれているせいも精神的に不安定な千景を安心させれる……筈。

千景がどう思っているのかは知らないけど。まあ、俺が千景の代わりに傷つけられていることを悲しそうにしているから根は優しいのだろうけど。

「……と、そろそろ授業の時間だ」

「次は寝ないですよ」

「分かってるって」

全く……この程度の授業なんて聞かなくてもいいのに。

「――!」

「うわっ!」

突如として揺れ始めた床に驚き、机の下に滑り込む。

じ、地震か?にしても今日は一段と多いな。

|||||

その後、授業は中止されて家に戻らされた。

そして夜、俺と千景は山の方にある小さな朽ちた社で座っていた。

今日は珍しくあの糞親父が家にいたから家出したのだ。

「暖かいね、そのランプ」

「……ああ」

俺と千景はランプの光を頼りに星を見る。

俺の手には古っぽいランプが握られていた。

このランプは先祖代々受け継いできた『絶えずのランプ』という物だ。その名前の通り、口伝では江戸……伝承では神様に授けられ平安よりも前から火を灯していて蠟燭、行灯、そしてランプと時代を重ね

てきているものだ。

あの糞親父はこれ売ろうとしていたけど、こういうことにも使えるから本当に助かる。

「うわっ!？」

「――!」

またしても地面が揺れ、俺はつい倒れこんでしまう。

痛ってえ……。今日は一段と多いな。

「あれ？ランプは？」

俺は落としたランプを探し……。その破片を拾う。

壊れちゃったか……。俺と親を唯一繋いでくれていた物だったのに

……。

「……………あれ？」

何か……。体の中に入ってきたような気が……。

取り敢えず、あの糞親父のいる家に戻ろう。あのゴミ以下の奴でも肉壁くらいにはなるだろうしな。

「おい、一旦家に戻ろう。……何か、嫌な予感がする」

「……………分かったわ」

千景は……。錆びた鎌の刃を持って社の方から歩いてきた。

何かは後から聞くとして……。家に戻ろう。

――まさか、全世界があんな事態になっているとは知らずに。

大社

「……入るか」

「……ええ」

俺と千景は多くの人が寝静まった深夜に家に入り、鍵を締める。

何故こんなスニーキングミッションみたいな事をしているかと言うと糞親父に見つかったら面倒な事になることが確約されているからだ。

「ぐがー……」

ふすまの奥で糞親父は空になった酒瓶を持ったまま熟睡していた。

この感じを見る限り糞親父は俺たちを探すような事をしていないようだ。一応、親権を持っている糞親父だが、それを精神的な面で完全に放棄しているな。

……そろそろ行政に頼ろうかな。俺は別にどうでもいいけど千景が今後どうなるか分からないからな。

「……なに、これ……」

「どうかしたの……何だこりや……」

テレビゲームでもしようとしたのかテレビを点けた千景は絶句し、俺もその状況を見て絶句する。

映し出されていたのは……『白い何か』が人を襲っている映像だった。

普通じゃない。普通じゃなさすぎる。フィクションだと思いたかった。けど……あまりにも凄惨すぎる死体が、真実だと訴えてくる。

「……取り敢えず、寝ましょう」

「……ああ。」

俺と千景はテレビを切り、布団を取り出して寝る。

……出来れば、夢であることを願って。

|||||

ピンポーン

明朝、家の中にインターホンの音が鳴り響く。

家の中には俺と千景がしかいない。千景は今は眠っている。糞親父は……どっかいった。もう数日も帰って来てないから死んでいて貰いたい。

「……誰だ」

扉の前に耳を押し付けて外の音を聞く。

……これは、鈴の音か？しゅんしゅんと言う音が聞こえる。

「どなたでしょうか」

「ここが、郡千景さんのご自宅ですか？」

入ってきたのは神主の服装を着た奇妙な仮面をつけた男が複数人だった。

あの糞親父じゃないぶんまだましか……？いや、それでもこいつらは怪しすぎる。

「それで、あんたらは誰だ？一応この家の人間だし、聞く権利はあると思うのだが？」

「……では、お話しましょう」

|||||

その話を聞いたとき、理解できなかった。

あの白い何かは『バーテックス』と呼ばれる人類を滅ぼそうとしてくる『天の神』の尖兵で、人類を守ろうとする『神樹様』という神がここ、四国を中心に壁を作り、そのバーテックスを殺すために人類の中から『勇者』を作り出した。そして、その勇者の一人が千景だった。

そして、神主みたいな奴等が立ち上げた『大社』という組織が千景を本部がある香川の学校に転入させるらしい。糞親父もそれを了承している。

あの千景が勇者か……。俺としては疑いたいところだけど……まあ、千景がこの蔑まれることしかされないここから抜けだせれるのなら問題ないか。

「……千景、起きてるよな」

「……ええ。話も聞いたわ」

布団から千景は起き、俺の方に近づいてくる。

聞いていたなら話は早そうだ。

「私は、香川に行くわ。けど、一つ条件を加えさせて」

「……叶えられる範囲なら」

「彼を……焰天理と一緒に連れて行けないかしら？」

……はい？

いや、俺なら問題ないから千景は直ぐにでも香川に行つてこればいいのに。

「……可能ですが……何故ですか？」

「彼は……私の友達だから。ここにいたら……多分、取り返しのない事になりかねないから」

「……分かりました。編入先と住まいは変わりますが……よろしいでしょうか？」

「ああ。構わない」

「それでは、準備をしますので少々お待ち下さい」

大社の人たちが荷物をトラックの中に詰め込んで行っている間に黒塗りの車に乗り込む。

まさか……こんな事態になるなんて予想できなかったよ。

「ありがとう、千景。俺はお前のお陰で助かった」

「……別に、礼はいいわよ。私だって、何時もあなたに助けってもらっているから」

「では、出発します」

引越し準備を整えた大社の人々が車に乗り込み、発進する。

さて、どんな生活が待っているのだろうか。

一年後

「……夢か」

俺は大社に宛がわれた安い借家の中でベッドから起き、背を伸ばす。

……あれから、一年ほど経過した。

俺はあの日から千景とは会っていない。会おうとしても大社の奴等が妨害してくるからだ。

多分だけど、千景たちはあのバーテックスたちと闘うための訓練でもしているのだろう。勇者を除いてバーテックスに対抗できる武器を持っているのは……俺くらいだし。

「……ふう」

俺は手から火を出し、ベーコンを焼く。

こつちにきてから数日後、偶々足の小指がタンスの角にぶつかって腫れたときに腫れた部分から『火』がでてそれを癒したのだ。

その日から俺の体から『火』が、そして『炎』を生み出し、操ることが出来るようになったのだ。

「ま、今の使い方は料理くらいしかないけど」

結果として、ガス代が浮くため重宝している。

焼上がったベーコンを野菜と一緒に食パンに挟み、机の前にあるテレビを見ながら食べる。

……大社から情報操作されているせいか、勇者に対しては肯定的な内容ばかりだ。

勇者、といわれる前は極々普通の小学生だったんだぞ？こんなにも周りからのプレッシャーがあると……重圧から潰れる奴がいそうだ。

それに、多くの人が『勇者』と言う存在を知っていると言うことは勇者には完全に逃げ場は無いと言うことになる。前にはバーテックス……いや、『星屑』が。後ろには『一般市民』がいて押しても地獄、退いても地獄と言う有り様だ。

もし、勇者が誰かが死んだとき……こう言った奴等は飛んでもない速度で掌返しするんだろうな。こいつら、絶対に勇者に守ってもら

のは当たり前前、何て考えが無意識にありそうだし。

「ちっ……」

朝からイライラするな……。

俺はテレビを切り、きつさと朝食を食べて中学に向かうことにした。

|||||

「おっはよー!」

「おはよう、桐生。」

俺が中学で本を読んでいるとハイテンションな少女が入ってきた。彼女の名前は桐生動きりうつとむ。何故『動』と書いて『つとむ』と呼ぶのかと言うと……父親が戸籍登録の際に書き間違えたらしい。てか、つとむって……女の子につけるような名前ではないと思うが……本人はとても気に入っているらしい。

性格はとてもハイテンションで趣味は漫才を見ることがという普通な女子……とは言えない趣味をしている。ファツションセンスは最悪で休日は基本的に『漫才王』という文字がでかど書かれたシャツを着用している。

俺自身はこいつをそこまで嫌ってはいないけどさ……うるさいからもう少し静かにして貰いたい。

「何読んでるん?」

「岩窟王」

「かー!まった難しい本を読んどんなー!」

俺が読んでいる本を見て内が面白いのか動は爆笑している。

ついでに言えば、こいつはエセ大阪弁を話している。何でも、漫才を見すぎて癖になってしまったらしい。

「てか、早く席に座れ。そろそろ授業だ」

「わかつとるっつーの」

頬を膨らませて座る動に呆れながら先生の話を聞く。

今日は……久々に外に出るか。

|||||

「じゃあなー!」

「おう、またな」

俺と動は学校で別れ、俺は家に帰る。

時間的にも問題ないと思うけど……さっさと帰ろう。

「ふう……」

俺は家で動きやすいジャージに着替えると、海に出る。

海にはデカい白い壁が聳え立っている事がここからでも視認できる。何でも、神樹様が『バーテックス』が入らないように作ったものらしい。

「よつと」

近くの小舟に乗り込み、手から放出された炎で壁まで近づき、壁ギリギリのところで停泊させて空を飛んで壁の上にとつ。

俺が用があるのは……この向こうだ。

焰

壁の外……一年前までは中国地方だった場所を歩く。

俺は週に二、三回ほど壁の外に出て探索している。理由は……生存者を助けたいからである。まあ、一人も見えてないけど。

「はあっ！」

俺に星屑が近づいた星屑に向け炎を射出し、一撃で仕留める。

俺の炎は何故か星屑や『バーテックス』にとても有効だ。一撃入れれば基本的に倒せる。

……そして、使っていて分かったが、俺の炎は正確には『炎』ではない。『剣』だ。炎に直撃した星屑は焼き斬られていたことから分かる。

「やっぱり、いないよな。」

元々繁華街あった場所を歩く。

白骨化した死体が道路にでて、その道路もコンクリートが捲れているところが多い。雑居ビルはガラスが破壊され、看板は落ちかけ、入ってきたであろうバーテックスに食い殺されたのか、血痕が残っている。

まさに、地獄だったんだな……。死んだ奴等は、本当に哀れだ。

「——『雀』」

俺は炎で何体もの雀を作り、窓ガラスの割れた窓から外に飛ばす。

『雀』は攻撃力と速度は絶無だが、コストの少なさや制御のしやすさから情報収集の手段として重宝している。

取り敢えず、今日のところはこら辺にバーテックスがないか確認した後、撤収しよう。

「っーいたか……！」

俺は突然頭に鳴り響く頭痛を確認した後、窓枠から外に出る。

雀がバーテックスを確認すると俺の頭が頭痛するように作ったからだ。

「……あれは、『キャンサー』。」

赤をベースとした色合いにエビっぽい見た目をした大型のバー

テックスを視認する。

キャンサー・バーテックス。大きな鋏と反射板、そして高い防御力を有したバーテックス。あの星屑たちが集まって出来る強化バーテックス、その最終形態の一つ。

さて、どう調理してやろうか。

『炎輪』」

俺を挟もうとしてくる鋏を炎の輪が包み、鋏を切り落とす。

武器はそこまで多くなくて助かるよ。レオやスコープイオンのような高火力、サジタリウスのような面での攻撃ができるやつじゃなくて。

『炎刀』——『爆』

押し潰そうとしてくる瞬間に腕を内側に振るうと炎の刃が反射板を切り裂き、修復不可能な程に爆散する。

これで全ての武装は解除した。傷が回復する前に……吐き出させてもらおう。

『炎刀』

手を縦に降った瞬間、キャンサー・バーテックスは一刀両断され、何かを吐き出す。

あれは御魂。あれを壊さないと勝ちにはならない。そして、キャンサー・バーテックスの御魂の特性は……何故か攻撃を紙一重で避けるというもの。正直に言えば……俺との相性はとてもいい。

何せ、『炎刀』や『炎輪』など数種類を除けば基本的に『面』の攻撃だからだ。

『業火』

圧縮した炎を放出し、御魂どころか星屑ごと燃やしつくす。うん、これで終わったな。家に戻ってうどん食べよつと。

依頼

「ふんぷーん。」

俺はのんびりと鼻歌を歌いながら朝食を作る。

今日は土曜日。学校がないからこうやってのんびりと朝食を作ることが出来る。

ピンポーン

「開いてるので勝手に入ってください。」

「では、失礼します。」

俺の借家に人が入ってきたのを感じながら、俺は何時でも炎を出せるようにする。

敵だったら……燃やせばいいし。

「……誰？」

「申し遅れました。私は鷲尾雛。大社に勤める者であり、巫女です。」
黒い髪を流し、大社の服なのか白い神官服を着ている女性が礼をする。

大社の『巫女』か……。勇者とは違って戦闘にはでないけど、神樹様から神託を貰ったりして勇者のサポートをするのが役割だった筈だ。

そんな高位の人間が俺の家に来ているんだ？

「何のようだ？態々近くを通ったから、何てふざけた事は言わないだろう？」

「ええ。内密にお話したいことがあります。」

「……話してくれ。」

俺はカリカリに焼いたベーコンとスクランブルエッグをパンに挟み、食べながら雛の話聞く。

さて、何を言われるのやら。

「……貴方は、長野にある『諏訪』と呼ばれる場所がある事を知っていますか？」

「名前だけな。」

「そこでは勇者に加護してもらいながら少数の人が生活をしていま

す。」

勇者……？つまり、千景たちと同じような存在か。

「貴方には、そこに行つて諏訪の人たちをこちらに避難させてください。」

……そういうからくりか。神樹様、あんたの目的は――

「おおよそ神樹様の神託か？」

「……？はい、そうですが……。」

「要するに、俺に死んでこいつで言っているようなもんだろ？」

「どうやら、神樹様はこの一年間俺が外での活動を知っていたようだ。そして、俺の能力……『炎』を知った。」

「そして、神樹様は自分が操作できない力を警戒し、俺を消そうと企んだ、そう言った筋書きなんだろう？」

「どうして、それを……！」

「予想が出来るからだ。まあ、俺は確かに神様の能力を取り込んだっほいからな。」

そして、この話を聞いて確信した。

俺はどうやら既に人ではなくなっているようだ。

恐らく、あの日……俺がランプを落としてこの炎を手に入れた時から。そりやそうだ。神様の力を人間が保有するなんて、人間には出来ない。

人間から逸脱し、神に近い存在……『現人神』。それが俺なんだろう。

「ま、そんな事はどうでもいい。」

「えっ？」

「受けてやるよ、その依頼。まあ、時間は掛かるだろうけど。」

あまりにもあつさりと引き受けた俺に雛は動揺する。

失敬な。俺は一度も依頼を受けないなんて言っていないからな？

「取り敢えず、今日からいくから学校にも伝えてくれ。……頼むが、内密にな。病気で入院した、とかでいいから。」

「わ、わかりました。」

俺はジャージに着替え、リュックを背負つて外に出る。

この中には四日分の食料と水分が入っている。これがつきる前に、
諏訪までたどり着けるか……まあ、試すしかないよな。

孤独の社

「万策尽きたああああああああああ!!!」

静岡県の山中で怒りに任せて星屑を燃やししながら山道を進んでいく。

くそっ……もう少しくらい食糧を持ってれば良かった……! そうですね、毒キノコを死ぬほど食いながら悶絶することなんて無かったのに……!

「けど、あと少しか……?」

俺は山道の頂上に登り、そこにある大きな神社にたどり着く。

このゴミから換算するとこの神社、前まで人がいたようだな……血の後から換算するに、もう既に全滅したようだけど。

「……ん?これは……。」

俺は石畳を見ながら少しだけ違和感を感じる。

この石畳……焦げている。いや、良く見ると柱や木の一部が焼け焦げている。ゴミの事や今の文明なら炎なんて方法は使わない。となると

(いるのか、俺と同族が。)

炎を使えるのは俺だけ、そう思っていたがこの社にも炎の使い手がいるのか。

「……おじゃまします。」

本殿に入ると、中は凄惨な物だった。

人だった物が散乱し、腐敗し、腐った臭いが本殿の中に充満していた。

ここが壊滅してからここまで日数がたっていないなかったようだな。……もう少し早くこれれば、結果は違ったかもしれないな。

「ん……?」

巫女服を来た原型を留めた死体の手が掴んでいた物を見て顔をしかめる。

その死体の手には剣があった。

俺が持っている炎の剣とは違い、形が炎のような突起がある、変

わった剣だ（いや、それを言えば形がない炎の剣も大概だが）。

ただの剣の筈なのだが……何故か気になつてしまう。簡単に言えばス○ンド使いとスタ○ド使いが引かれ会うような、そんな感覚がする。要するに俺の勘は当たっていた。

「……荷物は多くなるけど、持つていくか。」

背中の中のバツクの中に詰め込もうとした瞬間、剣は炎となり俺の体の中に吸収されてしまった。

えっ……？これ、まさか……。

（俺の炎の剣と同じ力だったのか……？）

いや、そうじゃない。

恐らく、さつき吸収したのは器だ。炎の剣と言う中身を入れるための器。それが一つになった事で炎の剣が本来の形に戻ったのだろう。「やれやれ……何でこんな辺境の地でこんな新事実を知らなければならぬのか……ん？」

うげ、周りにアホみたいに星屑どもがウジャウジャと……どこから沸いたんだ、こいつら。ゴキ……いや、闇の帝王Gか？どっちでもいいや。

まあ、言えるのは……

「汚物は消毒じゃあー！」

何時ものように炎の剣を取り出した瞬間、炎のような剣も一緒に現れ、何時もよりも高い火力で星屑どもを焼き付くした。

おう、すっごい。

まあ……貰つていくぜ、会うことも無かつた同族。